

異文化交流実践を授業へフィードバック

松浦 まち子 ・ 浮葉 正親 ・ 田中 京子

I. 基礎セミナー A (前期)「多文化社会を生きる」(代表:松浦まち子)

1. 授業のねらい

外国文化を持って日本で暮らす人々に焦点をあて、彼らの視点を通じた日本を知ることによって、日本社会の課題に気づき、様々な文化を持つ人々が共に生きることについて考える。

2. 受講者及び講師

受講生は学部生12名(内訳:教3名,法1名,経2名,理2名,工2名,農学2名)と付属高校生2名(2年生と3年生各1名)であり,TAは国際言語文化研究科博士後期課程3年の鄭在恩さん(韓国)にお願いした。ゲストスピーカーとして名古屋大学教育学研究科の元留学生モハメド R.S.アラニ氏(イラン,5/14),李成浩氏(在日韓国人,5/28)に参加してもらった。平成21(2009)年度は,浮葉正親,高木ひとみ,松浦まち子(代表責任者)の3名が担当した。

3. 授業内容

3-1 スケジュール

- 4/16 オリエンテーション,他己紹介
- 4/23 体験した異文化について発表する,異なる文化を持つ隣人について調べよう
- 4/30 韓国へようこそ
(TAの出身国の文化を学ぶ)
- 5/7 異文化疑似体験
- 5/14 ゲストスピーカー「イスラムの人々と文化」
- 5/21 DVD鑑賞「国際結婚」
- 5/28 ゲストスピーカー「在日の人々と文化」
- 6/11 自主上映会「日系の人々と文化」
- 6/18 レポートを書く時の留意点と文献検索方法,グループ分け,発表準備
- 6/25 発表準備,発表の順番決め
- 7/2 発表準備
- 7/9 (+補講)発表と討論(3グループ)

7/16 発表と討論(2グループ),まとめ,授業アンケート

3-2 口頭発表テーマ(グループ発表)

- ・イスラム教と女性
- ・国際結婚★日本xイギリスの場合★
- ・在日コリアンについて
- ・イスラム教について
- ・国際結婚～イギリス人と日本で結婚するには～

4. 評価

4-1 新しい試み:2008年度までは4回ゲストスピーカーによる身近な外国文化紹介をしてきたが,2009年度は,ゲストスピーカーは2回とし,新しい試みとしてDVD鑑賞を2回実施した。内容は,国際結婚に関する「ぶっちゃけ韓国に嫁いで」(NHK)と日系人の生活に関する「ブラジルから来たおじいちゃん」(アムキー)であった。いずれも内容的には学ぶことの多い興味深いものであったが,学生の反応としては映像による学習より,外国人ゲストスピーカーによる生きた教材の方が印象が強く,現実的な異文化衝撃を与えるように感じた。

4-2 学生の自発的な発言:ここ数年感じていることだが,学生の発言を促す難しさを思う。学生は何も考えていないわけではなく,文章にさせたり,指名すると考えを述べるが,自発的に活発な議論を続けることが困難である。高校までの与えられる勉強と大学での自発的な勉強形態の違いに戸惑っているのかもしれないが「自分の意見を言う」ことに慣れていない印象を持った。

4-3 高校生の授業参加について:受講許可の段階では,高校生の受講が学生部の刺激になると考えたが,大学1年生の前期であり,新入生でありながら先輩の自覚を持たねばならない学部1年生にとって,自由度が制限されマイナスの刺激になった可能性も否めない。また,高校生は中間試験やその準備

で欠席が多く、基礎セミナーではグループ分けの大切な時期だったことから、日程的に高校生の受講受入れには一考を要すると思った。

【参考】学生からのコメント（アンケート自由記載欄より抜粋）

- ★ いろいろな国のことを知ることができてとても楽しかった。高校生と一緒に学習できるのが新鮮だった。
- ★ アジアにはあまり興味がなくてあまり知らなかったけど、この基礎セミナーを通してアジアについてよく知ることができ、また興味を少し持つことができてよかった。機会があればもっと調べていきたい。
- ★ とても楽しい授業でした。先生が多かったのもよかったです。

Ⅱ. 教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」（代表：浮葉正親）

1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

2. 受講者及び講師

学部生は19名（名大生16，他大学生3）。受講者（名大生）の学部別内訳は、文学部3，法学部4，経済学部3，情報文化学部1，医学部2，工学部3であり、そのうち3名が留学生であった。他大学生は、相山女学園，南山大学，名城大学から各1名。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生10名（中国2，韓1，ミャンマー1，インドネシア1，オーストラリア1，チェコ1，ハンガリー1，スウェーデン1，ブラジル1），日韓共同理工系留学生7名，短期交換留学生1名（韓国1）を加え，日本人学生16／留学生21，計37名が受講した。

平成21（2009）年度は，浮葉正親（代表），田中京子，松浦まち子，高木ひとみの4名がこの科目を担当した。授業内容と担当は以下のとおりである。

3. 授業内容

3-1 スケジュール及び担当者

- 10／5 オリエンテーション（1）（全員）
 - 10／19 オリエンテーション（2）（全員）
 - 10／26 異文化との出逢い（田中）
 - 11／2 留学生と日本社会（松浦）
 - 11／9 グループ活動について（浮葉，高木）
 - 11／16 グループ発表準備（全員）
 - 11／30 グループ発表準備（全員）
 - 12／7 グループ発表と討論（全員）
 - 12／14 グループ発表と討論（全員）
 - 12／21 グループ発表と討論（全員）
 - *12／24 グループ活動から学ぶ（高木），
レポート提出について
 - 1／18 多文化社会について考える（田中）
 - 1／25 まとめ
- *補講

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1：日本人の若者ファッション
- グループ2：国際結婚の現在
- グループ3：日本人の外国人に対する姿勢を調べよう
- グループ4：交通規則を通してみる国民性
- グループ5：葬式について
- グループ6：日本の新年
- グループ7：親子関係

4. 評価

昨年に引き続き，グループ活動に対する評価を重視し，全体の40%（発表30%＋自己評価10%）とした。その他は，レポート30%，出席15%，クラス討論への参加度15%（10%は自己評価とした）である。グループ発表に対する評価は，五つの評価項目を作り，4名の教員による評価を15%，他の学生による評価を15%とした。結果的には，どのグループも積極的に発表に取り組み，24～25%を獲得した。発表のなかにはインタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く，全体に工夫が感じられた。レポートについては，レポートの採点基準や採点方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は，最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

- ★ この授業を受講することで，はじめて留学生と話

すことができたし、当然のことだけど、大学生は日本にいただけではなかった、海外にもいるんだと気付いた。外国籍の同世代と交流できたこと、それも1日や2日でなく4ヶ月間という長いスパンで活動できたことは貴重な経験だった。

★ 日本の文化や慣習を相対化してみられたと思う。ずっと日本にいれば日本のことがよく分かるというわけではなく、むしろ日本の「外」を見て他の文化に触れて初めて日本の本当の姿や良いところ、悪いところが見えるようになると思う。留学生の方たちは自分の母国のことについてたくさん知っていて、国に対する誇りといったものを日本人より強く持っているのかなと思った。それでもやはり、日本は世界で見ても本当に美しくいい国だと思うし、この授業を通して日本のことがもっと好きになりました。

★ 日本に来る前に日本の文化や日本人の習慣をすでに勉強していましたが、やはり実際に経験するのはその程度の知識ではまだ足りないと感じました。この授業のおかげで日本文化に対する理解も深まってきたような気がします。(留学生)

今年度も、愛知県下の大学の単位互換協定に基づき、他大学から3名が受講した。全員出席率もよく、授業への取り組みも積極的であった。

Ⅲ. 大学院授業「異文化コミュニケーション論 a/b」: 国際言語文化研究科 多元文化専攻メディア プロフェッショナルコース (担当教員: 田中京子)

2003年度に国際言語文化研究科日本語文化専攻で開講した科目「異文化接触とコミュニケーション」を、現在は同研究科の国際多元文化専攻メディアプロフェッショナルコースで「異文化コミュニケーション論」の授業として継続開講している。昨年度から前期と後期と分けての開講になり、前期と後期の参加者が多少異なった。異文化コミュニケーションの理論と実践を核として少人数セミナー形式の授業を進めた。

1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として主に英語を使用し

て話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的に公平なコミュニケーションについて考察する。

2. 参加者

国際言語文化研究科・国際開発研究科・教育発達科学研究科の大学院生と研究生、および聴講生と、文学研究科のTA、担当教員の約10名で毎回進め、必要に応じて学内外の学習支援者の協力を得た。年齢60歳代から20歳代までの男女、出身はエジプト、スリランカ、台湾、中国、フィリピン、ブラジル、ベトナム、日本と様々で、英語と日本語の運用能力も様々、他の協力者がいる時にはさらに多様なメンバーとなった。

3. TA: 文学研究科 D1 Yasmine Mostafa さん

TAは、エジプトで生まれ育ち、大学で日本語を専攻、日本で修士課程を終えて博士課程を履修している大学院生が担当した。日本語と日本文化に強い関心がある学生で、英語の能力も高く、異文化コミュニケーションの理論について熱心に学習し、経験も活かして授業での学生指導に役立てた。出席確認・討論参加の他に、学生が毎回宿題として英語で書くレポートの添削補助を行ない、毎回の授業の反省と次の授業の準備を担当教員と共に行なった。TAの補助は、参加者全員にとってたいへん大きな支援となった。

4. 授業内容

【前期】

- (1) 異文化間コミュニケーションに関する疑似体験学習と振り返り
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 異文化コミュニケーション理論 (文献購読:宿題)
- (4) 文献についてのレポート (宿題, 英語で執筆)
- (5) 文献についての討論
- (6) 期末レポート (事例解釈)

【後期】

- (1) 異文化コミュニケーション理論まとめ
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 事例作成, 発表, 討論
- (4) 事例解釈のレポート (宿題, 英語で執筆)
- (5) 事例検討論文

権力とコミュニケーションのテーマの時には名古屋大学ハラスメント相談所のスタッフが支援者として参加した。宗教とコミュニケーションのテーマでは、TAが中心となって発表と討論を行なった。

参加者間に生まれるコミュニケーションの実践の中では、積極性に差があったが、指名されることで声が出しやすいという意見もあったため、参加者全体が参加できるよう指名もしながら進めた。宿題レポートは毎回全員が提出し、TAも詳しく読んで添削およびコメントした。作成事例については全員が事例作成者にもレポートを提出するという形で、意見交換がより深くできるように工夫した。後期の期末レポートは、他の留学生たちにも役に立つ内容なので、論文集を作成できるよう助成金申請などを行っている。

5. 課題

教員はこれまで行ってきた国際交流関連業務や留学生相談の中で培った異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく取り組んだ。また反対方向に、この授業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育、教育と研究の接点として、それぞれにさらに深みを持たせるため、このセミナー式授業を大切に考えている。

今年度のメンバーは自己主張の度合いが低く、譲り合う気持ちを強く持っていたため、クラスが円滑に進んだ一方、メンバー間の葛藤や摩擦についてはクラス内では実体験できなかつたかもしれない。それぞれが教室外で経験した事例を通して、葛藤や摩擦を捉えなおす機会になったと思う。